



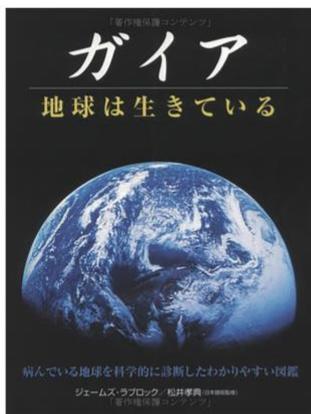
J・ラブロックの「ガイア理論」について

1960年代にラブロックによって提唱されたガイア理論とは、「自立した意志を持つ地球という惑星が、地球上に生息する生物群と相互に影響を及ぼし合いながら、自己調節システムを作り上げている」という説である。一方、「宇宙生命哲学」でいう「宇宙船地球号」は、高次元巨大環境生命体として地球環境と生命現象が一体となつて一つの生命システムを形成するという概念である。今回はこの2つのシステムについて、「原発」への対応を軸に比較してみたい。

ガイア理論の大きな特徴は、地球と、そこに生息している生物群を、それぞれ独立した実体と捉え、それぞれが互いに影響し合い、融合しながらシステムを動かしているとの考えである。時には、この両者が対立関係になることもある。

ラブロックは、1950年代以降の地球環境の温度上昇は、人間による行き過ぎた経済活動(化石燃料の過大な使用)によるもので、このままの速度で環境温度が上昇すると、21世紀末には、地球上の緑地はほとんど砂漠化し、人類の生息地域は僅かに残される局地に限られると警鐘を鳴らした。2004年に、その解決策として「原子力」の利用を推奨し、06年の来日の際にも、異常気象に対抗するためには、原子力発電を最大限利用すべきだと力説し、日本の「原発」政策にも影響を与え、地球上での「原発」敷設を大きく推進させた。

一方、宇宙生命哲学では、すべての生物は、地球環境から生まれ、死ぬと地球環境へ戻つてゆき、すべての生物は、地球環境を介して、過去から現在へ、さらに未来へとつながる時空を超えた巨大環境生命体を形成すると考えている。生物の死は、常に新しい生命に生まれ変わることである。そして、



ラブロック博士の著書

生命進化の過程で誕生した人類は、知識の蓄積を可能にし、人類の思考を支援する強力な道具として、科学・技術を構築した。この概念の中で、地球は自立した意志を持たない。巨大環境生命体の概念は、すべて科学的事実に基づいて構築されている。

この巨大環境生命体の行方は、人類が築いてきた科学の力によって導かれる。地球上で起こる化学反応は、原子間で起こる電子の状態変化なので、人類の現在の科学技術で操作し、制御することが可能である。しかし、原子核内の反応を制御することは、現在の科学技術では不可能である。このことから、「宇宙生命哲学」では、「原発」は宇宙船地球号にとって絶対悪であると断定する。